ときの玉手箱

～彦根城博物館からのメッセージ～

第370回

彦根藩御用絵師 佐竹永海 ―御用絵師の仕事―

佐竹永海（一八〇三～七四）は、奥州会津の出身で、早くに地元の狩野派の絵師に学び、十八～二十歳頃に江戸に出て、関東文人画壇を席巻していた谷文晁（一七六三～一八四〇）の門に入りました。

独立後の天保九年（一八三八）、永海は三十六歳にして彦根藩御用絵師となります。それは、井伊家十二代直亮（一七九四～一八五〇）の、文晁に絵師を紹介してほしいという要望に対し、文晁が永海を推挙したことに拠るものでした。

御用絵師・佐竹永海の最大の特色は、この直亮の私的な仕事が多かったということです。直亮は、永海自身の画を収集するのは勿論のこと、所蔵の画の鑑定をさせ、入手の斡旋をさせ、借用あるいは所蔵の画の摸写をさせるなどしています。さらには、雅楽器のコレクション中、最も大事な「予が家宝」とする龍笛の外箱の新調にあたり、文様の下絵を描かせるなど、多様な御用を命じています。永海は、様々なものを収集して一大コレクションを形成していた直亮の趣味をより充実させる役割を担っていたのです。

しかし、一般に、御用絵師の仕事と聞いて初めに頭に浮かぶのは、御殿の障壁画の制作でしょう。現存する永海筆の障壁画は、御殿の奥向き、つまりプライベート空間にあたる襖絵だけで、淡彩や水墨の落ち着きのある絵のみです。表向きという公的な空間を荘厳していた豪壮な障壁画は描いていなかったのでしょうか。

近年、この問いに対する答えを示す資料が確認されました。永海の手控えと見られる画帖（写真1・2）です。この中に、画面を突き抜ける大樹の松の杉戸絵が計6面描かれています。これは明らかに武家の御殿を飾る絵とみてよいもので、彦根城の御殿あるいは江戸の上屋敷のものと判断されます。

画帖の冒頭は、岩上の鷲図と竹に虎図の衝立（写真1）です。猛獣や猛禽の衝立は、伝統的に武家の御殿の玄関に飾られるものです。鷲図の本画にあたるものは、現在彦根城博物館に収蔵され、虎図の本画は、近年まで、下屋敷の槻御殿を利用した料理旅館の玄関先に存在しました。

画帖には、ほかにも御殿の障壁画の可能性のある縮図がいくつか描かれています。今後、建物の絵図面と照らし合わせることによって、これまで全く分からなかった彦根藩の御殿の室内の視覚的なイメージを一部復元できるかもしれません。

（彦根城博物館学芸員　髙木文恵）

写真1　竹に虎図（個人蔵「粉本画帖」より）

写真2　旭日に松図（個人蔵「粉本画帖」より）

写真の作品は、企画展「彦根藩御用絵師 佐竹永海―谷文晁 最後の高弟―」で12月7日（月）まで展示します（11月17・18日は休館）。